

あっ、枯葉が舞っている。街角に枯葉の吹き溜まりができるようになりました。晩秋のどんずまりに、雨が続き、突風が吹き、木にしがみついていた葉を振り落としてしまったようです。寒い冬がやってきました。

ジャズはお好きですか。モントリオールはジャズの街です。

「あ、和子、ここ知ってる？」

友達の車は、モントリオールの南を東西に横切る通りを走っていました。丁度通りの真ん中頃にカラフルなグラフィックのパネルが立ち並ぶ一角がありました。

「綺麗なパネルが一杯ねえー。」

「というより、そこを曲がってカナダ鉄道のモントリオール中央駅に行く一角がね、モントリオールのジャズの発祥地なのよ。」

「えーっ！、モントリオールって昔からジャズが盛んだったんだ。そう言われてみると、どこに行ってもジャズがライブで気楽にきかれるものね。」

「19世紀の始めごろ、黒人がニューヨークから生活の糧を求めてやってきてね、昔のウィンザー駅でポーターの仕事をしていたらしいの。黒人の出入りできるナイトクラブもその周りにできて、そのうち彼らの音楽、ジャズの演奏家がこのクラブにアメリカからやってくるようになったのよ。昼のポーターががー変してナイトクラブでジャズの演奏なんてこともあったらしいわ。(ウィンザー駅は今は歴史建造物になっています。)段々すごいジャズマンや歌手が、ここから出たり、ニューヨークからも有名な人たちが引切り無しにやってきたみたいよ。」

1920頃から1970頃までこの一角は、ジャズのメッカだったようです。

「当時は、ナイトクラブが何軒も駅の傍にあり、ジャズの演奏家やファンたちで溢れていたみたいよ。ナイトクラブだけでなく、その人達が暮らすホテルやアパートなどもその界隈にできていたのよ。」

「信じられないわ。」

「そりゃーもう、酒と女と音楽と。人の心を魅了して虜にしたようよ。」

「今は見る影もないのね。何一つ残っていないもの。」

初夏のジャズフェスティバルも偶然ではなく、こうした背景があつてのことのようです。以前の苦しい生活の中でのほとばしり出るようなジャズとは違いますが、今も、普段の暮らしのなかでジャズは生き、ライブハウスハウスやナイトクラブ風のビストロなど、あちこちで気楽にきかれます。

我が家のドリトル先生は、剣道の稽古の帰りに娘とライブハウスで最後の一曲をきき、生ビールを一杯あおってふーっと息抜きなどということもあります。

「和子、どう、ライブハウスに行ってみる。今夜はニューヨークのピアニストよ。」

と友達の誘いにのっていくと、

「どう、彼、どんな曲でも弾くのよ。ピアノさえあればいいのよ。ほぼ、音楽気違い。」

イケメンのピアニストは、ショパンの軽やかで優雅な曲から入ると、いつに間にかそれはややクラシックなジャズに変わり、間もなく元の曲などみるかげもないぎんぎんのジャズに変わっていきます。曲のなめらかさと変わり身の早さとかき立てるようなジャズの激しさに圧倒されます。そこに他のピアニストも加わり、二人でクラシックや本格的なジャズを弾きまくります。もう止めようがありません。

そういえば、この友人はジャズのアマチュアで、家の一角でジャズコンサートを体の不自由なご主人のための月に一度開いていました。10年間ほどコンサートを続け、ご主人がなくなってしばらくしてから、コンサートは閉鎖しました。今は、月に一度ジャズ好きの仲間たちとあちこちライブハウス巡りをするグループを作っています。

「来年はニューヨークジャズ旅行を皆でしようと思っているのよ。和子もどうー？」
Pourquoi pas? (それももしかかも)。街角には人の生きた歴史があるようです。